

## 京都市役所で働いて、私が学んだこと

著者	村上 圭子
雑誌名	真実心
号	40
ページ	51-78
発行年	2019-03-10
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1108/00000902/">http://id.nii.ac.jp/1108/00000902/</a>

## 京都市役所で働いて、私が学んだこと

村上圭子

みなさん、こんにちは。村上です。今、ご紹介いただいたんですけれども、長いこと京都市役所で働いていまして、三十五年ぐらいになります。すごいでしょ。みなさんが生きてきた倍くらい働いてきました。その間に、私が「人生の中でこういうことを大事にして生きるというよね」と思ったことを、みなさんにお伝えしようと思います。

みなさんは、これから資格を取られたり、職業に就いたりして生きていかれるわけですが、おそらく、今と、十年後、二十年後は、全然違う社会になっているだろうと思います。いろんなお仕事も、今とは違うスタイルになっているだろうと思います。今は技術革新がすごく進んでいて、AI（人工頭脳）が出てきて、「これからの職業は大きく変わるよ」と言われて大変不安に思われている方もいるかもしれません。そういう方に、ちょっとでも、世の中の移り変わりとは関係なく、自分がちゃんとこういうものを持っていれ

ば大丈夫なんだというものを、一つでも学んでいただくと思います。だから、今日はあまり複雑な資料は作っていません。簡単なレジメと、京都市が目指している最高理念『世界文化自由都市宣言』の文章だけをお配りしています。私がいろいろ話す中で、自分が「これかな」「こういうことを覚えておいたらいいかな」と思うことだけをメモしていたらいいと思います。

そこで、せっかくの対話の場合なので、お互いに理解しあわないといけないと思い、ちょっと私の背景をお話しします。私は京都ではなくて、北九州市で生まれて十八歳まで過ごしました。大学は今ご紹介いただいた神戸大学です。何となく「神戸という街がおしゃれだな」と思って来ました。そこで大学生生活を過ごした後、神戸があるのは兵庫県ですから、一旦、地元の兵庫県庁に就職したんですけれど、そこで今の夫と知り合いました。夫が京都大学に就職するというのでついてきてしまいました。その時に「同じ京都市内に勤めると、長いこと共働きできるよね」と思ったので、それからご縁で、ずっと京都市役所で働いています。子どもが二人おまして、みなさんよりも大きい二十七歳の娘と三十一歳の息子がおります。そういう背景です。

で、みなさんの方にもちょっと聞きたいなと思ひまして、参考までに。お母さんが働い

ている人？ ありがとうございます。結構多いですよ。そのお母さんの背中を見て「私もああいうふうになりたいな」となったりすると思うんですけど、さっき言いましたように、だいたい世の中が変わってきてますので、お母さんと同じようには生きれないかもしれないけど、お母さんの生き方からいろいろ学べることもあるし、そうじゃない方がいいよね、と思うこともたぶんあると思います。私は、お母さんとは違う感じのおばさんなので、その人の話も聞くと、いろんなサンプルを見てる方が自分の選択肢も多いし、いいかなと思います。もう一つ、京都で生まれ育ちましたという人？ あ、結構。三分の一くらいですね。京都で生まれ育ったことが自慢です、という人？ 挙げにくい？ 今は評価が難しいですか？ では、みなさんが外国に行ったとします。「私は日本から来ました」「日本のどこですか」と聞かれた時に、「From Kyoto」って答えるだろうと思う人？ ちよつとどうしようかなと思ってる空気が（笑い）。手を挙げたからといって当てたりしませんから大丈夫ですよ。どのくらいの人がそう思ってくれているのかなと思って聞いてみました。日本の中で、今、世界に出ていって、都市の名前を言って「なるほどね」ってわかってもらえるのは東京か京都くらいだと思います。大阪の人ごめんなさい。大阪もあるかもしれないですけど。私はいろんな外国の人に会って名刺を出しますけど、「京都ですか」

って、来たことのある人はみんな「素晴らしい」「美しい」って言ってくれますし、そうでなくても「一度行ってみたいな」と言ってくれるので、京都を認知していない外国の人はあまりいないかなと思います。これからはグローバルな社会なので、みなさんは外国の人と交流することも多いかと思えますけれども、その時は「From Kyoto」と言っていたらきたいなという思いです。

### 特別なまちⅡ京都市

「特別なまちⅡ京都」とレジメの一番上に書いてあるんですけども、どうしましょうか。当てた方がいいですか？ あまり当ててほしくないですか？ 「○○都市、京都」ってよくキャッチコピーが付いていますよね。ちよつといくつか思い浮かべてみてください。あるいは「○○のまち、京都」。すいません、私の前から二列めの赤いきれいなトレーナーのお嬢さん、思いつくことはありませんか。いいですよ、周りの人のお知恵も借りてもらって。思いつかない？ 誰か思いつく人？ いっぱいあると思います。はい、どうぞ。「古いまち、京都」いいですね、古い都と書いて古都ですもんね。「歴史都市、京都」

ありがとうございます。歴史が古い。七九四年に平安京が出来てから、長い間都でした。たくさんさんの文化が蓄積している文化都市でもあります。歴史都市とも言います。そして、古いですけども新しい面もあります。最近では、任天堂、ワコールは日本の若い人はたがい知ってますけど、それが京都にあるということを知っている人は少ないかもしれません。そうやって、長いこと「もの」を作ってきました。実は、「ものづくり都市」というタイトルもあるんです。何で「ものづくり都市」かというと、京都には昔、朝廷がありましたので、天皇家にいろんなものを貢ぐためにたくさんさんの職人が京都に集められて、そこで、宝石とか、飾り物とか、仏壇の飾りとか、宗教関係、皇室関係の、非常に美しいものを作ってきました。「ものづくり」も京都の伝統であります。その美しいものを作るために、日本全国から品質の良い材料を集めましたので、「京都でものを買うと高いよね」と言われることもあります。本物を作っているということとで伝統工芸品は値段が高い場合もあります。

それから、京都は国際観光都市でもあります。京都のまちを歩いていると、たくさんの方と会うと思います。祇園や、四条通を歩いていると、「どこの国かわからないよね」と言われるくらい、いろんな国の言葉が飛び交っているし、アジアだけじゃなく

て欧米の方も、たくさんの国の方が来てくださいます。観光客の数ですけれども、京都市として「五〇〇〇万人くらい来てほしいな」という目標を掲げたのがだいぶ前です。今は五〇〇〇万人をとうに突破しておりますし、宿泊客だけでも年間一四〇〇万人を超える観光都市でもあります。観光消費額は「一兆円ぐらい旅行者に使ってほしい」と目標を掲げたんですけれども、今では一兆八六二億円、これが平成二八年度です。もう少ししたら二九年度の新しい数字も出ますけれども、経済的にも観光が大きな部分を占めるようになってきました。

それから「大学のまち、京都」というフレーズもあります。京都は東京に次いで二番目に大学の多い都市でもあります。一四七万人の市民の約一割、一四万人くらいが学生さんです。だから、まちを歩いていると若い人が多いです。よく他都市から来た人が、「若い人が多いですね、素晴らしいですね」と言ってくれますけど、全国から学生さんが集まってきてくれるんです。学生さんが多いということは、大学の先生も多い。大学があるとすることは研究者の方も多い。研究者の方は、最近では日本だけじゃなくて全世界から集まってきてくれるし、ご家族ぐるみで京都に来てくださる方もたくさんいらっしゃいます。知的レベルの高いまちでもあります。

そういう特別なまちである京都市役所で働くことを私は誇りに思っています。これは入った時から思っていたわけではなくて、だんだんわかってきたことです。みなさんも将来お仕事をされる時に、自分のやっている仕事は価値のある仕事なんだと感じながら働くことがすごく大事だと思うんです。毎日、毎日、楽しいことばかりじゃないし、職場に行けば人間関係が上手くいかないこともあるでしょう。自分が一生懸命やったつもりの仕事でも評価してもらえないことがあるかもしれません。だけど、その仕事が本当に値打ちのある仕事なんだと思ったら頑張れるものです。

京都はいろんな面で特別なまちです。この『世界文化自由都市宣言』は四十年以上前に作られたものです。それを見た時に、「やっぱり、ここは特別なまちなんだな」と思いました。都市は、もともと人がたくさん集まってくる場所です。都という字、市という字、どちらも人がたくさん集まる場所です。京都市も、みやこ、みやこ、いち、なんですね。全部、人が集まってくるという字です。その中でも、ただ人が集まってくるだけじゃなくて、都市は理想を必要とするんです。その理想が世界を見てる。自分の歴史を、伝統をしっかりと考えて、どういう役割を果たしていこうかと市民がしっかりと考えて、その実現に努力するならば、世界史に大きな役割を果たすだろうと。



この「大きな役割」って何だろう。私は「平和」ではないかと思います。世界各国から人が集まってきて、「人種、宗教、社会体制の相違を超えて」と書いてますけれども、共産圏の人たちも来るでしょう、ヨーロッパの人たちも来るでしょう、肌の色の違う人も来るでしょう、その人たちが京都というところで、同じ景色を見て、同じものを美しいといい、同じものを食べて美味しいと思い、目と目を交わしてニッコリし合う。そういう触れ合いのある都市で自由な文化交流を行うということです。

文化と言いますと、みなさんは、演劇とか、音楽とか、古いものでいうと、能、狂言、日本舞踊とか、舞台芸術を思い浮かべると思うんですけど、それ以外にも人間が営んで来たことはだいたい文化でありまして、それを自由に交換する。例えば、歌、楽器は、言語に関係なく解り合えます。文学も、翻訳を要しますが、外国の文学も心に響くものがあります。絵画はまったく言語を要しません。そういうふうな文化を交流させて、世界の人たちが解り合えるまちでありたい、というのが京都の思いであります。どこの国の人でも龍安寺の石庭を見たら「心にしみるな」と言ってくれる、そういうイメージであります。そういう役割を持った都市だということを高い理想に掲げて前進していく。世界の人たちが平和のうちに、機嫌良く交流できるようなまちにしていくということが理想なんだ

と思うと、「京都市役所」で仕事をしなくては特別なことなんだろうと思います。世界平和にこんな形でも貢献できる。世界から来られたお客様に気持ちよくなってもらおう、良い環境で観光を楽しんでもらおう、そう思いますと、まちをキレイにしてくれている市民の人は立派ですよ。外国から来て、美しいお庭とか、立派な建物で感動する人もたくさんいらっしゃるんですけど、道にゴミが落ちてないということに感動する外国の方もたくさんいらっしゃいます。それから、落とし物をして戻ってくるとか、あるいは、道を聞いて、言葉は解らなくても必死で教えてくれた市民の人がいるとかね。そういうことが外国のお客様を感動させるし、そういう方たちは、京都のことも、日本のことも、好きやなと思っただけで自分の国に帰ってくれます。

日本は自衛隊はありますけれども軍備を持たない国です。日本にとって戦争は致命的なことです。攻撃をされることがないようにしていかないといけないわけですから、世界の人々から「あの国は立派だな」「好きだな」「良いところだな」と思ってもらうことがとりわけ大事なんですね。これまで日本は、高度経済成長の間は、たくさんお金を稼いで、そのお金を発展途上国のみなさんに分けることで「日本は大事だな」と思ってもらえるというように、経済で貢献することを長年続けてきました。しかし、これからは人口減少社会

でもありますし、そういう役割ではなかなか生き残っていけないのではないかと思えます。その中で、「文化で世界から尊敬されるような都市になりたい」という理想を掲げている特別なまちが京都であります。

## 京都市民の生き方

京都の何が特別かというと、レジメの2番「京都市民の生き方」です。京都市民の人たちはなかなか特別な人たちであります。長い歴史の中で生きてきて、歴史を大事にしてきた。文化を大事にしてきた人たちであります。地域のお祭りを守るために、ご自分の生活が少々忙しくても地域活動をするとか、そういうことをしてこられました。自分の家だけではなく表の道路も掃く、「門掃き」も大変美しい風習であります。そういう市民の生き方を表したキーワードが六つあります。良ければメモをしてください。「めきき、たくみ、しまつ、もてなし、きわめ、こころみ」です。これは京都市の世界文化自由都市宣言が最高理念だとしたら、その後に基本構想というものを作りまして、二〇〇〇年から二〇二五年の四半世紀の間に「こういう方向で行こうか」と決めたものです。その中で、京都市民

の得意とするところを掲げまして、「こういう生き方を大事にしてきた京都市民なんですよ」「それを生かすようなまちづくりをしていきましょね」ということで作りました。

今の六つの言葉を解説します。「めきき」は聞いたことがありますか。漢字で書きますと「目利き」です。これは本物を見分ける力があるということです。分かりやすい例でいうと骨董品とか絵を見て「これ、値打ちあるね」といった鑑定をやつてるじゃないですか、それを見分けられる人。「たくみ」は「匠」で、さつきも言いました精緻なものを作る職人さんです。手先が器用で良い物を作る。「しまつ」は「始末」で、ものを大切にするといいことです。始は始める、末は終わる、最初と最後を大事にするということでものを最初から最後までちゃんといかして使うという意味です。「もてなし」は説明いりませんね。人を温かくもてなす。「きわめ」は、最初に大学のまちという話もしましたけれども、研究の「究」という字を書きまして、とことん考えたり、とことん突き詰めたり、物事を究める。京都は宗教、哲学のまちでもありますから、「人間が生きている意味を考える」。「技術はどこまで行けるんだらう」ということを究めて、新しいものを生み出していくから、新しい企業も出てくるんです。古いだけじゃない。任天堂が元々カルタ屋さんだっていうのは知ってます？ 知ってた人？ ありがとうございます。そうなんです。ゲ

ームを突き詰めて、新しい技術を取り入れて、ゲーム機を売り出したということです。任天堂は、いろいろ究めたあげく、ベンチャーと言って、新しいものに挑戦して、新しいものを生み出した企業の例ですけれども、他にも、京セラさんのセラは何？ セラミックです。セラミックが今の半導体とか新しい技術にかかせないので、あんなに大きな会社になってますけれども、セラミックの元は陶磁器、焼き物なんです。昔、京都の人たちが使うお茶碗を新しい技術で焼き上げていた、その技を使って京セラができてきました。そして、最後の一つが「こころみ」、漢字で書くと「試」です。試験の「試」なのであまり好きな字ではないかもしれませんが、これは元々チャレンジするという意味です。京都は古いまちではありますけれども、新しいことにチャレンジすることも大好きな人もたくさんいます。これが京都市民が好きな六つのことで、京都市の基本構想の中に書いてあります。

京都市民は昔から、あんまり行政を頼りにしないという伝統があります。お上を頼らない。何でかというところ、七九四年から、貴族が政治をしたり、天皇が一番偉かったり、ついには武家にとって変わられたり、本当に世の中の強い人は長い歴史の中で変わるんやというところが、みなさん肌身で分かっているんです。自分たちを守るために、そういうものを

あてにせず、自分たちの力でできることをしようというのが町衆の知恵で、自分たちでいろんなことをやってきました。町衆が支えてきた祇園祭が一番良い例ですけども、ずっと伝統で残っています。だから「自立した市民」も一つの特徴なんです。本物を見分ける力とか、節約する力とか。さっき「〇〇のまち、京都」で一つ言い忘れたのが、「環境のまち、京都」です。『京都議定書』という世界的に有名な京都プロトコルということで、世界の人は「京都は環境の都市だね」と思ってくれてますけれども、その原点は「始末をする」「無駄なものを出さない」ということです。そういう都市で、そういう市民が生きている京都市は特別なまちなんだなと、私も長々働いていてじわじわとわかってきました。それは、何かに書いてあるとか、教科書に書いてあるとか、そういうことではなくて、私が今しゃべったようなことは、実際に当事者にお会いして、お話しを聞いて「そうなんや」とわかったことです。町内会で役をしている人にお話を聞いたら「わしが死んだ後でもな、この祭りは残さなあかんしな」とか、「僕らが死んでもまちは残んねや」そういうことをわりと普通に言われます。「伝統をちゃんと繋がなあかんねん」って、ご自分の身体の調子が悪くても、入院先から退院してきて、「子どもたちにお囃子を教えます」というおじさんが町内にいるのが京都なんだなと、だんだんわかってきました。それで京

都というまちの値打ちがわかってくると、仕事も面白くなってきました。

そうそう、「働く」という言葉ね、みなさん、学校で勉強した後、働くつもりでしょ。働くという言葉の起源は、「はたを楽にする」です。“はた”は自分以外の周りです。周囲の誰かを楽にするというのが「働く」ということなので、何かに貢献することなんです。難しく言う与社会貢献なんですけど、私が京都市役所に勤めて、市民のために何かしたいな、いろんな人を楽にしたいなと思ったら、毎日一生懸命働くことができるんです。私一人で成果が出せるわけではありません。たくさん職員の皆さんがいます。そのみなさんが、毎日、毎日、機嫌良く働いてくれること、その人たちを楽にすることが、さらにその周りの人を楽にしていける。働くということとは、自分一人で終わるのではなくて、次から次へ連鎖していくものです。それが社会の繋がりでありますので、一生懸命働いていきたいなと思います。それが「職員としての学び」に繋がっていきます。

## 職員としての学び

職員として働きながら勉強したことがいくつもありますので、それをお伝えしたいと思

います。京都市に入って、研修やセミナーでいろんな人の話を聞く機会がたくさんありました。それもすごく恵まれていたなと思うんですけど、その中で私が特に大事にしてきたのは、人権を学ぶ研修です。人権というのは、その人が生まれながらに持っている権利ですけれども、それが全部の人に同じように保障されてるかというところ、なかなかそうでもなくて、昔は女性と男性も権利が違っていました。選挙権も十八歳に下がったのでみなさんも投票に行けるんですけども、それも、ただで転がり込んできたわけではありません。昔、選挙権は税金を一定額以上納めている人にしかなかった。それも当然のように男性にしかありませんでした。明治以降もそういう時代が長いこと続きました、そのあげくに太平洋戦争がありました、戦後になって初めて女性が選挙権を得ることができました。ところが今、投票率がすごく低いんですよ。特に、十八、十九歳の投票率が低いんですけども、これはもうちょっと考えた方がいいです。女性は特にそうです。女性が男性と当たり前のように一緒に選挙ができるようになった、その権利をちゃんと行使しないとイケないなと思います。女性の方が体力的に弱いんですよ。だから、DVとか家庭内暴力とかにすごく弱くて、被害者になりがちです。それだけではなくて、何かと、職業上もいろいろ差別されてきて、その一番最初が選挙権だったのでないかと思います。



それから、身体のどこかに障害のある人は障害のない人に比べると権利が制限されま  
す。目の見えない方は私たちが当たり前のように見ている新聞も見れないですし、テレビ  
も見れないですし、耳の聞こえない方は電話が聞こえませんし、手話通訳を必要としたり  
しますし、何かと制限されます。そういう差をなるべく埋めていこうと、人間が元々持っ  
ている「幸せになる権利」を達成していこうというのが人権研修でありました。

みなさん、またここでちょっと問いかけですけれども、頭の中にご自分が「この人好き  
だな」とか、「親しくしてるな」と思う人を五人くらい、あの人と、あの人と……って、思  
い浮かべてみてください。思い浮かべてもらえました？ その人たちの中に、年齢が三十  
以上の人はいますか？ なかなかいないですね。それから、外国人の人はいますか？ それ  
から、身体のどこかが不自由な人いらっしゃいますか？ 知的障害を持っている人いらっ  
しゃいますか？ いらっしやる方はすごく素晴らしいんですけど、いなくても別に構わな  
い、それがほしい普通なんです。私たちは無意識のうちに、自分と同じような人たち、  
同じ属性の人たちとお話しをするという傾向があるんです。そういう人たちと友だちにな  
って、毎日同じ境遇の人たちと話しをしていると、当然のように、そんな人たちしか世の  
中にいないような気持ちになってしまう。そして、知らず知らずのうちに、そうではない

人たちが何となく特別な目で見てしまう。あるいは「その人たちはちょっとくらい人権が制限されていても当然なんじゃないか」と思ってしまう。そういうことを、私も人権研修の中で教えてもらいました。

今、マイノリティーとして話題になっているのがLGBTの人たちです。レズビアン、ゲイ、バイセクシャル、トランスジェンダーといった、異性と恋愛をするのではなくて、同性の人が好きであったり、「(身体は)女性として生まれてきたけど男性の方がなじむよね」と思っている人たちは結構な割合でいらっしやるんですけど、それを言うと、今まで友だちだった人が離れていくんじゃないかとか、世間からどんな目で見られるんだろうかとか、なかなか自分に正直に生きられないと悩んでしまうことがあります。あるいは、そのことでいじめられたり、仲間はずれにされたりして悩んでいる人も多いです。しかし、少数者の人たちを尊重するというか、自分と相手は違うんだけど、「別にそれでいいやんか」「あの人はあの人、私は私」と。障害のある人でも、絵が上手いとか、お話しが上手とか、物事を深く考えているとか、あるいは、障害があるからこそ、悩みに悩んで深いところまで辿り着いた人もいっぱいいます。だから、自分とは違う人をリスペクトできるように人になってもらいたいと思います。そういう人ばかりだったら、人権や差別

を目くららを立てて言わなくてもよくなる。〇〇ハラスメントとか、残念ながらもまだまだ世の中で起こるんですけど、それはたぶん自分と違う人をあまり理解できずに、知らず知らずのうちに傷つけてしまっているのではないかなと思います。世の中からハラスメントというものがなくなればいいなと思うんですけども、残念ながら、インターネット上では匿名でいろんな意見が言えますので、面と向かってはなかなか言えないような、人を馬鹿にする言葉とか、人を傷つける言葉が飛び交っています。それは、人を貶（おとし）めることで自分の優位を獲得したいとか、自分はあの人より偉いんだと見せつけたいとか、言っているその人も心が貧しいのではないかと思うんですけどね。なかなか人間、そういう研修で習った通りにはいかないんですけれども、「そういう問題点があるよね」「少数者の人のこともわからないといけないよね」という気持ちでいると、自分自身が逆の立場になった時に生きやすいだろうと思います。

例えば、会社とか、役所とか、どこかの施設とか、組織に入ると、必ずチームを作って働かないといけません。グループとか、係とか、課とか、何かの単位に属することになるんですけれども、気持ちよくコミュニケーションを取って、お互いに情報を共有しないと仕事は上手くいきません。そこに、「好き」とか、「嫌い」とか、「こんなこと言われた」

とか、「あんなこと言われた」とか、そういうことがあるとなかなか上手くないかな。人間関係の根本はいくつかあると思うんですけど、人と自分を比べるということが結構大きいと思うんですよ。「あの人に比べて自分のほうが実は優秀なのに評価されていない」とか、「私の方がいっぱい働いているのに同じように扱われる」とか、自分と人をついつい比べて評価されることがギクシヤクする原因だったりするんです。でも、人と自分を比べてもあんまり意味がないんですよ。比べるポイントがいっぱいあってキリがないんです。「今日の自分の方がちょっと勉強したよね」とか、「ちょっとここが偉くなったよね」とか、「いろいろ練習して上手くなったよね」とか、昨日の自分と今の自分を比べることはすごく意味があるけれども、他人と自分を比べるのは、そもそも環境も違うし、生いたちも違うし、あんまり意味がない。でも、人間はついついやってしまっんです。そこに、人間関係が上手くない理由があるんじゃないか、というのが最近私が思っていることです。

それから、京都にいたからこそできた、京都市役所にいたからこそできた体験もいっぱいあります。文化とか、スポーツとか、いろんなところで一流の方たちとお会いできることもすごく大事だなと思います。お花の家元さんとかね、お茶の家元さんとかね、そうい

う方たちにお会いすると、文化人だからって決して偉そうにしておられません。一流の、本当に文化を身に付けた立派な人は、偉そうに見せる必要がないんです。自分の中にちゃんと持つてるから。気さくで、自然で、自分が極められたお茶やお花のことを一般の人にわかりやすく話してください。みなさん、お花とか、お茶とか、習ってます？ お茶習ってる人？ お花習ってる人？ 生け花じゃなくてもフラワーアレンジメントとか、花に係のあるものを習ったことありますか？ あ、おられました。良かったです。ありがとうございます。お花は自然の中で生きてるものでしょう。「咲いているものを無理に切つて、花瓶に入れて、部屋の中に飾るのはどうなんやと思って悩みます」と生け花をやっている人がおっしゃるんですね。でもそこであえて、「野に咲いていても綺麗なお花を、わざわざ切ってきて部屋の中に飾るには、何か意味があるということを自分の中で思いたい」「それをよくよく考えました」「野に咲いていてもたくさんの人が見てくれるとは限らない。人が見るといことは、見る人の心を癒す。その花が誰かのために役に立つということ」「たくさんの人の心を癒したり楽にしたりするために切ってきて、たくさんの人に見てもらおうということで、（花はしばらく生きると枯れますから）この花たちが美しく咲いているうちに役に立てるように、美しく咲いた目的が達成できるように、せいぜい美しく

生けるんだということを考えて、お花を生けています」と、ご自分の職業を突き詰めて考えてるんだなということがよくわかるんです。お仕事はそういうものかなと。

お能をやっている人にも聞きますけど、お能ってすごく昔の芸能だけれども、今も生きつづけているし、理解してくれる人がいます。しかも、たまに外国の人もお能を見て感動してくれる。こういう芸能というものの意味は何なんだろうかと、すごく深く考えている方々にお会いして、「人生って何となく生きてたらあかんねんな」「よくよく意味を考えないといけないよね」と私も思うんです。そういう勉強ができるということも京都だからだと思っんですよ。

お能は六五〇年続いた伝統芸能ですけども、お能を形にした世阿弥という人が、「一〇〇〇年続く芸能にしよう」と思って、いろんな仕掛けをして、ああいうものを作り上げたらしいです。これは受け売りですけども、『能―650年続いた仕掛けとは―』という本を書いた著者の方に直接お話を伺いまして、お能って深いんだなと思いました。私もまたお謡い（おうたい）をやってみようと思っています。お謡いをやると長生きできるそうです。身体に良いことがあるそうですので。お能を生で見たことがあります？ さすが京都ですね、何人かいらっしやる。もう私の田舎とか行ったら、たぶん一人もいない。あ

の動きはすごくゆったりしてるようで、身体の中の筋肉とか、本当に芯から使うらしいです。それで、お能のすり足で歩くと全然疲れないらしいです。昔、車がなかった時代の人たちが長いこと旅をするじゃないですか。歩き疲れないようにすり足で歩くんです。そういえば最近マラソンでね、ものすごく早い人はあまり足を上げない走法で、それなのでは？と思うたりもするんです。そんなふうには、今に生かせるようなことも勉強しながら市役所で働かせてもらっています。

### 女性が働くことの意義

ちょっとみなさんに近い話です。さつき手を挙げてもらいましたけど、お母さんが働いている人はたくさんいらつしゃるようですし、私は、全然専業主婦の方の生き方を否定するつもりはないんですけれども、これからの世の中は、女性が働いた方が良いやろうなと思うこともいくつかあります。そのうちの一つは、「自分のため」です。結婚をして、その相手に全部を託して、「私は家庭に入って家事をします、あなたは外でお給料をもらってきてください」というのは大変リスクなことでもあります。男性がずっと元気でいらっ

しゃるとは限りません。ストレスの多い世の中でし、先ほども言いましたけど職場ではいろんなことが起きますので、時には嫌になってお仕事を辞めたくなることもあるかもしれない。あるいは、自分の思うような仕事をしようと思ったら組織の中ではなかなか出世できない、上司と喧嘩をするような場面も出てくるかもしれない。そういう時に、男性が一人で家族を背負って働くというのは、かえって自分が好きなように働けない場面も出てくるんじゃないかとも思います。男性も女性もどちらも経済力があれば「嫌だったら辞めてもいいのよ。おうちのこととして。私頑張って働くから」「また良い仕事が見つかったらいいじゃないの」というような、ちょっとゆとりのある選択ができるんじゃないかなとも思います。あるいは、「その男性を完全に信用できますか」。ずっとあなたを大事にしてくれるかどうかわかりません。「誰に食わしてもらってると思ってるんだ」ってドラマみたいなことを言う人がいるかどうかはわかりませんが、無意識のうちに自分だけが経済を担っていると、そんな気持ちになる人も中にはいるんじゃないかなと思います。結婚する時点では先がわからないんですよ。これは私が、ずっと働き続けられる仕事として公務員を選んだ理由の一つです。京都市で働くのは大変素晴らしいことではあるんですけども、「自分に経済力がある方が人生安心だよ」と思ったことも理由の一つなんです



す。それは個人的な理由ですが、先ほど選挙権のことを言いましたけど、ものごとの意志決定をする時に、男性と女性がいるのに、世の中全体を動かす方向性を決める時に男性の意見だけでいいんですかと。男性と女性はものの考え方も感じ方も少しずつ違います。女性は子どもを産むようにできている性であり、男性はそうではない。身体の構造も違います。脳科学者の話を聞いていると、脳の動かし方、ものごとを積み上げて考える思考とか、情緒と理論の間のつながり具合とか、男性と女性では違っているようです。男性も女性もいる世の中ですのに、いろんなことを男性だけで決めている。会社でも、最後の消費者は男女半々です。場合によっては女性の方が消費の決定権を握っていることが多いかも知れません。そういう中で、男性だけで会社運営をしていく、ものごとを企画していくと、どうも間違うんじゃないかと、女性も経営の中に入ってもらわないと正しくお客様に向かった会社経営ができないと、最近、企業の人たちも思い始めています。京都市役所もそうです。市民の半分は女性です。だから、市政の方向を決めるときに、男性だけの思考で決めるのはどうかと思います。経済のことも大変重要なポイントではありませんけれど、同じぐらい、意志決定に加わることも非常に大事なことだと思っています。

そういうことで、みなさんにもぜひ、お仕事を続けてほしいなと思います。これもさっ

きの男性の話の裏返しで、女性も仕事にしがみつこうと思いつめると自分を追い込んでしまふことがあるかもしれないかもしれませんので、ゆるやかに考えながら、自分としてポリシーを持って、世の中の役に立ちたいとか、働くということはこういうことなんだとか、自分の力をどういうふうに蓄えていったらずつと働き続けられるんだろうかとか、ご自分なりに掘り下げてもらったらいいかなと思います。

ノウハウを教えてくれる本は本屋さんに行けば山ほどあります。「〇〇ができる」「〇〇資格がとれる」「人と上手につきあえる」、いろんな本がありますけれども、そのテクニクだけを学ぶんじゃなくて、一番根本のところ、考え方のところですね、先ほど言いました、「どんな人でもリスペクトできる人になろう」「どんな人とも分かり合えるようになる」とか、そういうことのほうが、最後に自分が幸せになるために大事なんじゃないかなと思います。

ちなみに、私がずっと社会人として大事にしていることがあります。これは友だちと会話をしている時に「相手によって態度を変えない人って立派だよ」という話になり、「そうだ、そうだ」ってなったんですけど、私も人によって態度を変えないでおこうと思っています。自分より若い人だからとか、自分より何となくお金を持ってなさそうだから

とか、会社の中で上の地位にいるから、下の地位にいるから、そういうことで態度を変えてるのではなくて、相手がどういう意見を持っているのか、どういうことを目指しているのか、どういう人格の人なのか、をしつかり受け止めて、それによってちゃんとしたお返事をしようと思います。誰かわからなくても、とりあえず会った人には挨拶しようと思っております。お掃除をしてくれる人には「ありがとう」という気持ちで頭を下げようとか、自分が何かお世話になっている人にはリスペクトの態度を取ろうとか、そういうふうになんか心がけています。こういうことは、何も副市長だからとか、市役所の人だからとかいうことではなく、人間としてずっと生きていて、どんな場面にも役立つことではないかなと思います。

今日はいろんなお話しをしてまいりましたけど、みなさんの方から何かお聞きになりたいことがありますか。聞きにくいですよ。例えば、私がちよつと質問を作ってみます。「子どもを育てながら働くのって結構大変じゃなかったですか」というの、あります？ 子どもがちっちゃい時ね、小学生とか保育園とか、そのぐらいの時に大変じゃなかったかと言われると、時間が足りないなと思ったことはあります。身体が二つあったらいいなと思ったこともあります。せつかく小学校のドッジボールで選手に選ばれたのに行つて

やれない、そういうことはありました。だけど、子どもが大きくなってから「やっぱりお母さんが働いてて良かったわ」って言ってくれたので、私も働いていて良かったなと思いました。正直、保育園に預けてる頃は本当に自分の時間はないです。五時にパッと職場を出て、保育園に行って、二人連れて帰って、晩ご飯を作って、次の日の支度して、朝送っていつて、また一日仕事して…って、その時、その時、は忙しいんですけども、後で考えると、忙しい中続けてきたことが自分の自信になったし、子どもたちは、そういうお母さんの背中を見て、「まんざら忙しいことも悪くないよね」って思ってくれたみたいです。ドッジボールの試合は見に行ってやらなかったけれども、そのことをよそのお母さんから「活躍してたよ、○○ちゃん」と教えてもらえる。そういう人間関係を作っておくということも大事ですが、そうすると、自分の目で見えたよりもっと値打ちがあるような気がしてくるんです。そのお母さんにそういう誉めてもらえるってね。それが嬉しかったりもするので、まんざら時間がないということも悪いことばかりではないなと思いました。

人間には一日二四時間しかないし、すごく長生きしても一〇〇歳前後で、もっと短い年輪かもしれない。自分にどれだけ与えられているかわからない。最後まで読めないんだけれど、とりあえず、いただいた時間を一生懸命生きるということは悪くないなと思いま

す。ほんやりしてても一年過ぎるし、楽にしても一日過ぎるんだけど、スポーツをやつて練習が大変で辞めたいと思つても、頑張つて得られるものがあつたらいいんじゃないかと思ひます。いろいろみなさんも大変なことがあるでしょう。なるべく後で「ああ、よかったな」「私も頑張つたよな」とか思えるようにしていただけたらと思ひます。

では、私からの話はこれぐらいにいたしまして、何かお役に立てることがあれば幸いです。今日は、みなさんにお目にかかれて、良いご縁をいただけて、とても良かったです。ありがとうございます。ありがとうございました。

——二〇一八年六月二九日——